しろぎつね

熊本応援

かねこ　としこ

むかしむかし

あんたがた　どこさ
肥後さ
肥後どこさ
熊本さ
熊本どこさ
船場さ
船場山にはタヌキがおってさ
それを猟師が鉄砲で撃ってさ
煮てさ　焼いてさ　食ってさ
それを木の葉でちょいとかぶせ
コーン

唄っているのはだーれ？

ここは肥後は熊本、城下町
武者返しがそびえるお城
満月の晩でした。
お城の屋根のてっぺんで唄っているのは、
真っ白い毛並みの銀色に輝くしろぎつね。
コーン

しろぎつねは、そっと城下を見まわしました。
船場橋には、とぼとぼと歩く人影がありました。
わっはっはっは
たぬきの大きな笑い声が響きました。
「あっ、清正郎さんだ。今日もぞうりが売れんだったか」
しろぎつねは、悲しそうにつぶやきました。
清正郎は泣きながら、
「母ちゃん、また売れんだったばい。どぎゃんしたらよかっだろう」
と死んだ母親のことを思いうかべました。
その時、しろぎつねは、真っ白なしっぽを一振りしました。
お城の屋根をキラキラと輝きながら、何かが落ちていきました。
「何だろか？　あら、かんざしばい。きれいかな。もろて帰ろ」
清正は笑顔になって、歩きはじめました。
たぬきはくやしそうに見ていました。

布ぞうり

そこは、馬小屋のような小さな家でした。
清正郎は、かんざしを明かりのほうにかかげて、じっと宙を見ていました。
「何かよか方法はなかっだろか」
何時間たったでしょうか。
「そうたい。わらぞうりば布で作ってみたらどぎゃんだろう。ばってん、布はどぎゃんしたら」
また、宙をながめて、考え込んだ清正郎は、
「母さん、すみまっせん」
そう言うと、たんすから、死んだ母親の着物を出し始めました。
「三枚だけですけん、すみまっせん」
清正郎は、そろりそろりと着物を裂きはじめました。

清正郎の部屋に朝の光が差し込みました。
清正郎は、布ぞうりを編む手をとめて、
「母さん、たのみますばい」
とじっと目を閉じました。

大人気のぞうり

熊本の城下町を大きな声が響きわたりました。
「布ぞうりはいらんね。はきやすかばい」
清正郎の声です。
きれいなかんざしをさした、姉さんたちが通りがかると、
「あら、きれいかなあ。買っていこうかい」
と口々に言って、ニコニコと布ぞうりを履き歩きはじめました。
城下町は、清正郎の布ぞうりで、あふれました。
「どぎゃんしよう。のうなってしもうた」
清正郎は、まだ、真昼なのに、荷物をまとめると、家へといそぎました。
船場橋をとおりがかると、たぬきがギロッとにらみました。

撃たないで

馬小屋のような家に帰った清正郎は、
「わしも大金持ちになるばい。疲れたけん、はよ休もう」
きのうの徹夜がたたって、いびきをかいて寝てしまいました。

その夜のことでした。
たぬきが家へと忍び込みました。
「いまいましかな、清正郎は！　」
そうはき捨てるように言うと、いたずらをはじめました。
清正郎の大事な着物を泥足で踏み始めたのです。
それを見つけたしろぎつねが、
「そぎゃんことばなしてするとな」
とたぬきをとめに、飛び込みました。
物音に気づいた清正郎は、銃をかまえました。
たぬきがさけびました。
「撃たんどってくれ、わるかつぁおれだけん」
「母さんの大事な着物ば」
バーン、バーン
たぬきもしろぎつねもバタッと倒れました。
しろぎつねの口から、ポロとかんざしがおちました。
「わしは、なんてことばしたんだろか」
清正郎は泣き崩れました。
すると、
たぬきは黒い煙になりました。
しろぎつねは白い煙になりました。
そして、フッと消えてしまいました。

戸をたたくのはだれ？

扉をたたく音がしました。
トントン、トントン
泣きはらした目で、清正郎は
「だれね」
と言いますと、
「キャハハ」
と笑い声がします。
急いで、扉を開けると、そこには、二人の童子が手をつないで、たっていました。
男の子は黒い絣を、女の子は白い絣を着ていました。
「こぎゃん、夜中に何ね」
女の子が笑いながら、かわいい声でいいました。
「わたしたちゃ、死ぬ前によかことばしたけん、神さんが童子にしてくれたつ」
清正郎は、童子を抱きしめました。
そして、
「さむかろう、入んなっせ」
と家の中に入れました。

行かないでくれんね

男の童子が小さな声で謝りました。
「すまんかった、大切な着物ば汚して」
「もうよかつ、よかよか」
清正郎の笑顔を見た、童子は
「行かんば、行かんば」
と出て行こうとしました。
「行かんでくれんね」
「いや、神さんにしからるっとよ」
清正郎は急にさびしくて泣きたくなりました。
「ぬしたちゃ、裸足だろが、まっとれ、布ぞうりば作るけん」
清正郎は、ニコニコとぞうりを作り始めました。

童子の声が
キャッ、キャッ
と響きわたりました。
清正郎は、精一杯心をこめて、ぞうりを編みました。
「できたばい」
「清正郎さん、ありがとうね」
「ありがたか、寒かったけん」
童子は布ぞうりを喜んで履きました。
「それじゃあ、もう行かんと」
扉を開けると、童子は手をつないで歩きだしました。
童子が小さくなるまで、清正郎は、見送りました。
「また、来なっせよ、必ず来なっせよ」
涙をこらえて、扉を閉めました。

あんたがたどこさ
肥後は熊本のお話でした。

熊本城

私は、熊本で育ちました。
熊本城には子どもの頃から、遊びに行き、大好きなお城です。
熊本地震で、熊本城の石垣が崩れているのを、テレビで見て、大きな衝撃を受けました。
だって、熊本城は武者返しのある、すごいお城なんです。
この本は、無料ですので、読んでくださった方は、わずかでもかまいませんから、熊本に義援金を送ってください。
熊本城が、水前寺公園が、天草が、もう一度すばらしい観光地にもどることができますように。
そして、被災者のみなさん、遠くでふるさとを思っている、たくさんの熊本県人がいます。
がんばってください。

熊本市出身　　かねことしこ
２０１６、４、１９

しろぎつね

http://p.booklog.jp/book/106180

著者：かねこ　としこ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/colorful-koneko/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/106180

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/106180

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ